

# アミーゴ会だより

2026年1月  
通巻第65号  
季刊 2026-I

[www.mex-jpn-amigo.org](http://www.mex-jpn-amigo.org)



発行人：河嶋正之  
編集人：河嶋正之  
事務局：吉野 隆

## メルバ・プリーア大使から メキシコ・日本アミーゴ会によせての 新年祝賀メッセージ



Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la  
Asociación "Amigo-Kai"

Tokio, enero de 2026

Al comenzar un nuevo año, es un buen momento para reflexionar sobre lo que nos dejó el año anterior y valorar los lazos que nos acercan como comunidades. El año que termina nos recordó de diversas maneras la importancia de la paz, la tolerancia y la armonía, valores que siguen siendo esenciales para construir sociedades más justas y cercanas. Estos principios han definido históricamente la relación entre México y Japón, países amigos que se respetan y se apoyan mutuamente.

Desde la Embajada de México, expresamos nuestro reconocimiento a la Asociación Amigo-Kai, cuyo trabajo acerca a nuestros países y enriquece el entendimiento y la amistad entre nuestras comunidades.

Que este 2026 nos permita seguir celebrando la diversidad de nuestras tradiciones y contribuir, con cada gesto, a un mundo más pacífico y solidario.

Atentamente  
*Melba Pría*  
Melba Pría  
Embajadora de México en Japón



メルバ・プリーア大使（大使館提供）

### アミーゴ会の皆様へ

2026年1月

東京にて

新しい年の始まりは、過ぎ去った一年を振り返り、私たちを結びつける絆の大切さを改めて考える良い機会です。

昨年、平和・寛容・調和の重要性をさまざまな形で私たちに思い起こさせてくれました。これらの価値は、より公正で親しい社会を築くために欠かせないものであり、また歴史的に、互いに尊重し、支え合う友好国であるメキシコと日本の関係を形づくってきた礎でもあります。

メキシコ大使館は、両国の関係をより親密なものとし、私たちの間の理解と友情を豊かにして下さっているアミーゴ会の活動に、心からの敬意を表します。

2026年が、私たちの多様な伝統を共に祝い、ひとつひとつの行いを通じて、より平和で連帯に満ちた世界に寄与できる一年となりますよう願っております。

敬具

メルバ・プリーア  
駐日メキシコ大使

(メキシコ大使館和訳)

# 新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会  
会長 河嶋正之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。会員の皆さんにおかれてはお健やかに初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年が素晴らしい一年となることを祈念します。

メキシコ・日本アミーゴ会は2025年、伝統の諸事業のみならず新しい取り組みとして「メキシコ料理教室」に挑戦し（本誌別項参照）、好評のうちに会員相互の交流と親睦を深める一助とすることが出来ました。

残念なことに7月24日、本会名誉会長の上原尚剛様が薬石効なくご逝去されました。享年89歳でした。上原名誉会長は日墨間の親善と本会の発展に多大なる貢献をされました。ご葬儀に際して本会は供花をさせて頂き、会員から寄せられた追悼文を本誌10月号（第64号）に掲載しました。

会員総会は5月に対面開催し、2024年度事業報告・決算および2025年度事業計画・予算が承認されました（本誌第63号参照）。会報「アミーゴ会だより」は会員諸氏のご投稿を戴き年4回の発行を継続し、メルマガではメキシコ催事案内を配信しました。第24回Fiesta Mexicanaは9月13～15日にお台場で開催され、墨日両国の絆を深める事業として本会は例年どおり後援しました。

メキシコ歴史・文化講演会は「大航海時代の日本とメキシコ」を主題に大使館別館で全3回開催しました。第1回は岡美穂子・東京大学史料編纂所准教授にメキシコ・中南米に渡った日本人奴隷について改宗ユダヤ人移住との脈絡でお話いただき（本誌第64号参照）、第2回と第3回は柳沼孝一郎・神田外語大名譽教授にメキシコ副王府と秀吉政権および家康政権の外交政策についてご講演いただきました。

なお、2026年はメキシコの日墨協会設立70周年で、2027年はリセオ（日墨学院）の設立50周年です。また、メキシコは1897年に榎本植民団35名が最初の組織的海外植民としてチアパス州に足跡を記した地で、2027年はメキシコ移住130周年です。くわえてメキシコは明治日本が希求した平等条約の初の締結国であり、2028年は日墨修好140周年となります。本会はメキシコ大好き人間の親睦と両国の友好親善の拡大を目指すボランティア活動団体です。これらの周年をも相互理解深化の好機といたく存じます。

メキシコは初の女性大統領であるシェインバウム大統領の指揮下、新しい国づくりを着々と進めています。また、北の隣国の理不尽な諸々の要求を前に冷静に対処しています。とくに今年はUSMCA（T-MEC：墨米加三カ国協定）の改定年にあたり、すでに難度の高い経済・貿易交渉が展開されています。

2026年の干支は「丙・午（ひのえ・うま）」で、丙も午も“陽”を表徴し、燃える情熱と行動力で新しいことに挑戦する最適の年とのことです。この星に安寧と平和の再構築が一日も早くもたらされることを期待し、日々努力したいものです。（了）

\*\*\*\*\*

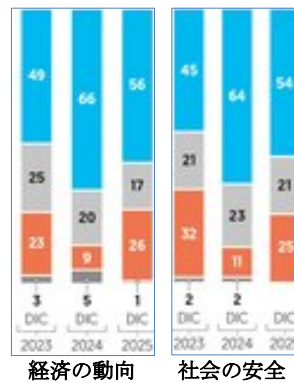
## メキシコ短信

### 2026年は良き年との期待高まる

メキシコの金融経済紙 El Financiero の2025年12月中旬世論調査\*では、2026年への国民の期待は72%が「良い・とても良い年になる」と引き続き高い期待を抱いている。他方、25%が「悪い・とても悪い年になる」と悲観している。シェインバウム大統領が10月に誕生した2024年末調査では、2025年は87%が「良い・とても良い年になる」と期待し、「悪い・とても悪い年になる」が5%だった。

\*El Financiero 紙2026年1月2日付電子版

経済分野では2026年は56%が「良くなる」との期待を抱いている一方で、26%が「悪くなる」と見



通し、「変わらず」と17%が答えている。前年調査では2025年が「良くなる」との答が66%、「変わらず」が20%、「悪くなる」が9%だった。

また、社会の安全分野では2026年は54%が「改善する」と見ている中で、25%が「悪化する」と見做し、「変わらず」と21%が回答している。前年調査では2025年は「良くなる」が64%、「変わらず」が23%、「悪化する」が11%だった。（了）

## = 目次 =

1. 新年祝賀メッセージ	駐日メキシコ大使	メルバ・プリーア	...1
2. 新年のご挨拶	アミーゴ会	会長	河嶋正之 ...2
3. アミーゴ会活動報告：「第1回メキシコ料理教室始末記」	アミーゴ会	事務局長	吉野 隆 ...3
4. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ一人旅 17 一花の絨毯とアトリスコ」	アミーゴ会	会員	阿部修二 ...4
5. メキシコ短信：「2026年は良き年との期待高まる」（El Financiero 紙調査）			...2
6. 私の本棚：山本淳一著「フェアトレード原論」	／	あとがき	...6

## 第1回メキシコ料理教室始末記

報告 事務局長 吉野 隆

メキシコ・日本アミーゴ会初のメキシコ料理教室が2025年10月19日(日)、品川駅近の品川区立総合区民会館(きゅりあん)4階の特別調理室で開催されました。会員・非会員合わせて32名の仲間が雨模様の天候にも拘わらず参加して頂きました。

料理講師には、駐日メキシコ婦人会の代表者で、上智大学やセルバンテスセンター等でスペイン語を教えておられ、各地でメキシコ料理教室を開催されているシルビア Silvia さんをお招きしました。

参加された皆さんは、シルビア講師の指導の下でメキシコ料理を楽しく調理し、調理終了後にはシルビアさんによるメキシコ口講座を暫し拝聴し、調理した料理を楽しく、美味しく会食しました。

筆者自身生まれて初めての料理教室参加で、事前にエプロンなどを購入しましたが、当日エプロンの着付け方が分からず、講師のシルビアさんに着付けのお手伝いをしてもらうところから始まりました。

会場には参加者用として6つの調理台があり、5名で1台の利用でしたが、参加者は自然に分散し、野菜の水洗いや包丁による鶏肉や野菜のカット調理等も自然に分業され、和気あいあいとした教室の雰囲気でした。



### メニュー

1. Sopa de Pollo
2. Guacamole
3. Nopales Salada
4. Tacos de Picadillo
5. Fajita de Pollo
6. Crema de Canela

料理教室はシルビア先生がスペイン後でまず説明、その後お嬢さんがそれを日本語に訳し、一方ご主人は材料の調達・運搬、講習会場までの輸送を担当されるなど、シルビアさんのご家族総出での活躍でした。

報告者は、皆さんの調理台を回りながら、材料の準備の確認や調理器具やお皿などの調達に努めたため、残念ながら調理には参加できませんでしたが、最後に講師がお手本として調理した料理を講師のご家族と堪能することができました。参加者から回収した料理教室へのアンケートでは、皆さん楽しんで頂いた様子で、また開催してほしいという要望が沢山あり、主催者としては、胸をなでおろすと同時に来年度の料理教室開催に向けて大いに激励となりました。<了>

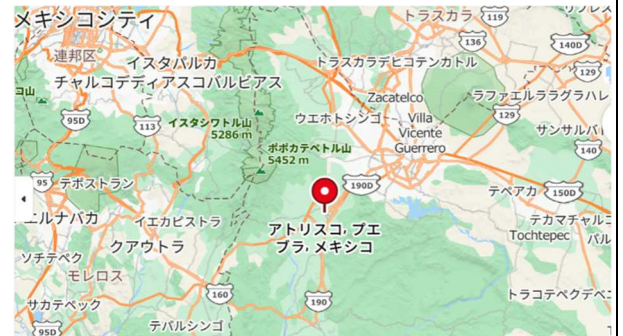


ぶらりメキシコ人旅  
 一花の絨毯とアトリスコ=プエブラ州—  
 (Atlixco)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員  
 写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

秀峰ポポカテペトルの膝元にあるアトリスコAtlixcoは、プエブラ市南西30km程のところにある風光明媚な地方都市だ。都会嫌いな私は、プエブラに用事があっても、わざわざこの町まで足を延ばして宿をとることにしている。アトリスコは市域が狭いので歩きでどこにでも行けるのが楽しいし、市街地を出ればすぐに農地が広がり、しかもそれが花畑なのももっと嬉しい。この町は花の町で、メキシコ市はもちろん、海外にまでそうした花卉が輸出されているのだそうだ。



花の町・花屋さんの可愛い店主

この町を最初に

訪れたのは30年以上も前のことで、ここにあるフランシスコ会の旧修道院・教会を撮影するためだった。この修道院・教会は町の中心にほっそりとそびえる、まるで人口のピラミッドと思しき整った円錐型のセロ (cerro=丘=サン・ミゲルの丘) の登り口に位置して、ソカロ (中央広場) からその教会の背や鐘楼が見えている。だが、なぜそのような狭くて中途半端なロケーションに建てられたのか不思議でならない。



ソカロからホテル、修道院、丘の礼拝堂を仰ぐ

旧修道院・教会を撮影した後、意を決しセロに登ってみた。セロの高さはそれほどでもないが、道は円錐を巻くようにしてあり、それだけ距離がかさむように作られている。もともとメキシコ中央高原は海拔2000mの高地だから、ゆるい坂道を登るだけで息が切れてしまうので大変だ。頂上には下から見えていた小さな礼拝堂がぼつりとあった。もしかしたら、被征服前の神殿の痕跡などありはしないかとかすかな期待をもっていたが、残念ながら裏切られることになった。

旧修道院・教会の不思議な立地

さて、先の建設場所に関わる疑問に私は二つほど結論を導き出そうと試みてみた。そのひとつは、もともと旧修道院・教会の場所に先住民のピラミッド神殿があったので、先住民の宗教を根絶やしにするためにその敷地に建てたのだというもの。そして二つ目は、このセロの頂上に先住民の重要なピラミッド神殿があり、それを破壊して修道院・教会を建てようとしたが、麓に住む先住民に毎朝のミサを義務づける難しさがあり、改宗を急いでいた修道士にとって都合が悪かったというもの。

私はこの町の近郊にある以前に紹介した Cholula の、同じくフランシスコ会の旧修道院・教会を思い出した。巨大なピラミッドを更地にすることを諦めてその麓に建てたというあの修道院・教会である。それにしてもこの美しい丘はこの町のシンボルで、先住民にとっての心のより所であったことは疑いないから、立地の理由は後者のように思う。



噴煙を上げるポポの前庭アトリスコ

そのセロに登ったことは徒労ではなかった。西を望めば、メキシコの歴史をその高みから眺めてきた秀峰ポポが、葉巻を啜って黙する老人のように噴煙を上げ続けている。さらにセロからの360度の景観は見る者を退屈させることはない。被征服以前からそうだったという保証はないが、市街地の外に広がる花の絨毯を眼下に見ることもできる。

もともとスペイン人植民地プエブラ周辺の土地は、首都に住むスペイン人に食料を供給するためにスペイン人農民に分譲された土地だった。征服後まもなくスペイン人は仕方なくトウモロコシを食べていたが、先



セロから花のジュウタンを見下ろす

住民の上に君臨する彼らはヨーロッパの主食パンのための小麦を求めていた結果だった。今日ではその役目も終えて、換

金作物である花卉栽培に力をいれているせい、人々の心根もどことなく柔和に感じる。

当初からこの土地が耕作に適した土地ではなかった。この土地が変わったのはスペイン人農民が入植した後で、ここに水道橋を建設して耕作地に水を供給



市内に水を送る水道橋

できたことによるものだった。耕作地に水路を張り巡らせてこの土地を有望な耕作地に変貌させたのだった。



家族総出でグラジオラスの出荷作業

教会の祭祀に欠かせないグラジオラスや鶏頭、マリーゴールドなどの畑で朝早くから出荷に精を出す農家の人がいた。

花畑を手前に入れてセロと噴煙を上げるポポを撮影すれば、何とか絵にできるから、ゆっくり郊外を歩いて撮影する楽しみがここにはある。

### 美しきだまし絵

古いメキシコの町ではソカロの西に位置するのは決まって要塞型の修道院・教会なのだが、先に述べたようにアトリスコの旧修道院・教会はサン・ミゲルの丘の足下に建っていた。教会屋上を十字にうがたれた壁が取り巻いている。宗教建築物だから当然



丘の登り口に建つ  
フランシスコ会旧修道院・教会

と思われるが、先住民の反抗時に教会に逃げ込んだスペイン人が弓矢から身を守るための胸壁である。その堂内を覗いてみたが殺風景な内装で特筆する物は見つけられなかった。

一方、町の中心ソカロの西に外壁が黄色いサンタ・マリア・デ・ラ・ナティビダ教区教会堂がある。この教区教会堂は外観こそ装飾を排したシンプルな

建物だが、内装は特筆すべきものがある。

身廊の両壁、そして天上の円ドームに施された装飾は、一見凹凸のある手の込んだ立体装飾のように見えるが、金箔を施して巧に描かれただまし絵で満たされている。天上の幾何学的な模様



教区教会堂だまし絵のドーム天井



教会堂・内壁のだまし絵

驚きだが、私は植物が描かれた壁面の模様につきり魅了されてしまった。以前紹介したプエブラのロサリオ礼拝堂の豪華な黄金の空間とは趣が全く異なるが、精緻で品のある空間を演出している。

こうしただまし絵の教会をいくつか知っているが、それを徹底した教会を見たのはここアトリスコのこの教会だけである。17、18世紀、メキシコ市やプエブラ市の食糧供給基地だったアトリスコには多くのアシエンダがあり、経済的な繁栄を誇っていた。この建物はそうしたアシエンダ所有者たちの資金によってなされたのだと思う。

信者席に腰を下ろして、しばし静寂を楽しんだ後、教会入り口左翼にある物置になっている小部屋を覗いた。かつては礼拝堂だったとおぼしき小部屋に、聖母マリアに抱かれたキリスト像を見つけた。



物置小屋のキリストとマリア像

タ・マリア・デ・ラ・ナティビダ（聖夜の聖母）が磔から下ろされた傷だらけのキリストを慈しむその姿は、壊れた家具が

置かれた小部屋という舞台がさせたのか、信者でもない私に迫るものがあった。

### 花の町の「死者の日」

10月31日の「死者の日」に合わせてマリーゴールドの畑では出荷の準備が始まる。このマリーゴールドだが、メキシコ、南アメリカ原産で、メキシコでは太陽の花として先住民の祭祀には欠かせない花である。征服者スペイン人はこの花をヨーロッパに持ち込んだが、その花を彼らの大好き、黄金に見立ててマリーゴールドと命名したのかもしれない。

コロナ旋風が巻き起こる直前の「死者の日」にアトリスコにいた。ソカロにはマリーゴールドのポットが敷き詰められ、さすが花の町だと思ひ知らされる。市庁舎の中庭には死者を悼んで祭壇が設けられ、午後から骸骨のメイクをした中学生のパレードが始まるというのでソカロの東屋の地下にできた米国のチェーン店でコーヒーをすすって時間を費やした。



マリーゴールドで「死者の日」を盛り上げる



死者の日の祭りの行進が始まる



独立戦争時代の骸骨の兵士たち

アグアスカリエンテスの版画家ホセ・グアダルペ・ポサダの風刺画のカトリーナに分した女子中学生、骸骨のメイクに背広、あるいは鉄砲を持った兵士が繁華街を行進する。メキシコで骸骨がこれほど日常化したのは、先のカトリーナに寄るところが大きいと思われるが、死者の日になると町のお菓子屋のショーウィンドウに骸骨のお菓子がお目見えする。メキシコ人の友人が、お土産だと言って握り拳より大きいそれをくれたことがあった。私も妻もその処理？に困って放置していたら、アリが集まって来たことがあった。アリにはありがたいが、日本人にはありがた迷惑？といったところか。



さて、どうしようか。どくろのお菓子

メキシコ人にとって骸骨はどんな意味を持っているのだろうか。死者に対する畏敬の念か。あるいは

どんな人間も肉体が滅びれば骸骨に帰するという人生訓か。それとも悪ふざけ、ホラーの道具か。テノチティトランやチチェン・イツアーの遺跡には多くの犠牲の骸骨を串刺しにしたレリーフの祭壇が残されている。彼らの先祖の宗教儀式、すでに500年以上前の過去のことだが、神々に捧げられた犠牲の骸骨の神聖化が彼らの遺伝子の中に深く刻み込まれているのではと思いたくもなる。

でも太陽の花マリーゴールドに彩られたアトリスコの「死者の日」は、古い時代の宗教的な趣きはない。日本のお盆のような旅立たれた肉親への追慕や祈念という色合いは薄れ、今流行のコスプレを競い見せ合うお祭りのようだ。日本ほどではないがお隣米国の商業主義が影響しているのかもしれない。市役所の中庭で骸骨の麗人にお目にかかった。写真を撮らせていただけますかとお願いしたら、施しを求められた。あちらの世界も大変なんだと同情してしまった。



市庁舎の骸骨の貴婦人

### 【連載その17完】

注1.掲載写真の転載不可。  
注2.写真細部はPC画面最大化でお楽しみください。

\*\*\*\*\*

### 私の本棚



### 『フェアトレード原論』 ～ラテンアメリカから問い直す～ 山本純一著

2025年12月刊 359頁 3,600円＋税  
フェアトレードの歴史と現状を反植民地主義の視点から捉え直す一書。  
メキシコ・チアパス州のコーヒー生産現場での実践を基にグローバル資本主義との関係を検証し、人々が連帯・共生する「公正な」社会への新たな多元的経済システムを模索(明石書店HP参照)。とくに第5章ではコーヒー生豆の輸出(1次産業)、生産地国内での焙煎豆の販売(2次産業化＝国内フェアトレード)を、第6章では生産者自身の手によるコーヒーショップの経営(6次産業化)による付加価値の向上と別の市場づくりの実践活動を報告。(了)

あとがき：会報「1月号」をお届けします。またまた編集人の個人的事情と怠惰が重なり発行が完全遅延。プリーア大使および寄稿者のみならず読者の皆さまにもお詫びします。地球上では、人類が築きあげた平和で自由な世界をいともたやすく破壊する大国指導者たちが闊歩しています。米国の“ドンロー主義”の無法にメキシコも諸国も懸念かつ賢明に対応しています。11月の中間選挙が鉄槌を下すのでしょうか。日本の突然の総選挙では欧米の趨勢から十数年遅れて絶対多数の保守右派政権が誕生しました。安心して暮らせる世界の再構築への貢献を期待したいものです。私たち一人一人が声を上げ行動するとき至れりです。冬季五輪での選手たちの演技が一服の清涼剤ですね。[20260210 か]